

# 西東京市立田無第2中学校と練馬区立光が丘第8小学校で 林和彦・東京女子医大教授が出張授業



田無第2中学校での林教授の授業



光が丘第8小学校での林教授の授業

東京都西東京市の同市立田無第2中学校で1月13日、東京都練馬区立光が丘第8小学校で2月8日、日本対がん協会の協力でがん教育の出張授業が実施された。講師は、いずれも東京女子医科大学がんセンター長の林和彦教授。田無第2中学校では、全校生徒370人を対象に計約70分、光が丘第8小学校では6年生28人を対象に2時間90分の授業が行われた。

林教授は、がんの専門医として約30年がん患者や家族とかがわってきた中で、がん教育の必要性を感じ、昨年には教員免許まで取得して、学校でのがん教育に取り組んでいる。

中学校と小学校の授業だったが、いずれの授業でも林教授は、自身が中学3年で父親を胃がんで亡くしたときに、その1週間前まで何も知らされてなかったため、大好きだった父親に何もできず別れてしまった経緯を語り、「知らないことのつらさ」を強調。

父親のかたき討ちのためにがんの医師になり、がん教育にも取り組んでいることを明かした。

また、一生のうちに男性では3人2人、女性では2人に1人ががんになるデータを示し、だれもがなる可能性がある身近な病気であることを説明したうえで、がんを防ぐための新12か条を紹介。中でも「たばこを吸わないことが第一」として、15歳までにたばこを吸ってしまうと、吸わない人より将来がんになる確率が30倍になることや、他人が吸うたばこの煙を吸うことでも肺がんの死亡率が約1.2倍になることを説明し、「これから先、たばこを吸わないで」と強調した。

さらに「がんを早期に見つけ治療すればほとんどが治る一方で、症状が出てからでは大変」と、検診の大切さを訴えた。

また、授業の後半では、がん患者の気持ちについて事前に子どもたちに書

いてもらったメモを示しながら、林教授が、自身が治療で接してきた患者の想いも紹介し、大切な人ががんになったときに何ができるのかという想いを共有する時間にしていった。

将来がんといわれた時でも「あわてないように今日のことを思い出してほしい」と、林教授は呼びかけていた。

光が丘第8小学校での林教授の話し方は田無第2中学校での話し方に比べるとやさしいものの、内容はほぼ同様で、児童も熱心に聞き入っていた。

また、光が丘第8小学校での授業後には、保護者や区内の養護教諭を対象に、がん教育の必要性を解説した。

その中で、授業で実施したように、子どもたちががん患者の気持ちに思いをめぐらせることで、健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようになる効果などを指摘していた。